



発行
洛星新聞局
京都市北区小松原南町
☎ (463) 3281 (代)
編集長
井上 広 隆
局長
佐々木 隆 地
印刷
片桐軽印刷
京都市北区紫野下石竜町20

第34回 文化祭開催さる

雨に見舞われながらも 今年も盛り上がった三日間

去る九月二十(金)、二十一(土)、二十二(日)の三日間、第三十四回文化祭が開催された。残念ながら今年も最終日は雨に見舞われたが、皆日常の生活とは一味違った青春の一時を満喫していた。



ユニークな文化祭

校長 村田源次



文化祭は一年間の学業のまとめの発表であり、またクラス全員のまとまる機会でもあることは言うまでもありません。何故、洛星の文化祭がユニークでなければならぬか、洛星がミッシェンスクールであり、現代社会を如何にとらえ、未来に向けて新しい人間づくりの確固たる信念を持っているか、生徒諸君に対して保護者は勿論のこと、多くの方々が大変な期待を持っているからです。

現代は科学や技術の進歩で、物質的には豊かになりました。しかしその反面、道徳の退廃、家庭の崩壊、差別の問題、人間疎外による精神病患者の増大、公害の問題等を考える時、真の平和国家とか、理想国家と

総 評

今年の文化祭は、悪天候に見舞われたものの文芸を中心に多くの生徒の積極的参加のもと無事三日間の日程を終了した。

今年の文化祭には恒例の演劇、合唱、展示、小講堂等における催しの他に視聴覚教室において、高一の新企画が実現した。これは洛星の文化祭における一つの前進だったといえる。

しかし高校生生徒会主催の小講堂フェスティバルに於ける進行上の不手際、参加する側の態度等、問題もないうわけではなかった。

来年は今年の反省をふまえ、さらに充実したものであてはしい。

高校演劇

今年の高校演劇は、残念ながら例年に比較して物足りないという印象をまねがれなかった。高一の「燃ゆる夢」は、学年演劇の一般的傾向を打破し、白々しいシナリオから抜け出したという点で評価できる。しかし、台詞が聞きとりにくかった上、女優の生徒に笑いを浴びせるなどせつ々しくの新傾向を台無しにする行為があったのは残念である。高二の「海の底の六人」は、よくあるストーリーではあつたが、それぞれ役を演じきれていて、さすが高二と思わせる内容であった。

中学演劇

今年の中学生の演劇は3作とも今一つ盛り上がりにかける所があったようだが、一年生は木下順二の「夕鶴」にチャレンジした。台詞をもっとゆっくり、はっきり喋れば尚よかった。二年の「点滅」は、去年より格段にうまくなっている。ただオープニングにもう一工夫欲しかった。

三年の「生命判断」が賞をとったのは当然といえ、当然か。アラを捜せば、背景に関するミス(夜でも空が青色)だろうか。その難しさにもかかわらず、完成度の高さは十分評価されて然るべきものだったと言える。

高校合唱

今年の高校合唱は曲の軽さでお茶を濁してしまい全体的にレベルが低く感じられた。特に高一の一部のクラスは選曲に難があつたように思われる。それに比べ高二合唱はキャリアの差がものを言うのか、伴奏、指揮、共に重厚さを感じさせ、六クラス中四クラスが入賞を果たした。来年は他学年にも一層の努力を期待したい。

中学合唱

中学合唱は、中三Dが最優秀賞、中三Cが優秀賞と中三が他の学年に抜かれるということもなく、妥協なところには落ちついたが、もうひとつ皆がのびたというクラスも多かったように思う。それと、歌声が小さいのか、ピアノが大きすぎるのか、ピアノばかり目立っていたクラスも少なからずあった。全体としてはそう目立って下手なクラスもなく、まずまずのレベルにあると思う。また来年も頑張してほしい。

展示 展示最優秀賞を獲得した高一BパートII「性へのアプローチ」はなかなか良くあったが講師の指摘にあつたようにまとまり過ぎていたように感じられた。もう少し主張を前面に押し出したほうが良かったのではなかろうか。同パートIII「高校生

は考えている……のか」は「高校生」という点に着目した面白い展示で同パートIIよりも良いという声もあつたようだが何を言いたいかという点が弱かつたような気がする。

今年話題の「ハレー彗星」がテーマであつた天文部は解説を易しくした点を買ったがもう少し内容を盛り込みにして欲しかった。また、「未来予知の否定」等珍らしく一般受けするテーマを選んだ宗教部は文字がぎつしりとつまっている上に文章が難解極まりなく、大変読みづらかつた。係員にも熱意があまり感じられなかつた。



表 彰

合 唱

- 高校最優秀賞 III F
- 優 秀 賞 III A・II A
- 優 良 賞 III B・III E・II F
- 中学最優秀賞 3 D
- 優 秀 賞 3 C
- 優 良 賞 2 C・1 A・1 C

演 劇

- 高校 グランプリ なし
- 優 秀 賞 H II
- 中学 アカデミー賞 M 3
- 敢 闘 賞
- 展 示
- 最優秀賞 H I Part II

衣 笠

前期生徒会で、最も頻りに活動するのはどこであろうか。評議委員会でもなければ風紀委員会でもない、言うまでもなく文化祭企画委員会である。

ところで、その重要な役が、実質上公の選出を経ることなく任命され、なおかつ一部のみに独占された状態にあることを御存知だろうか。

言いかえれば、文芸のメンバーの多くは、中三の時、非公開のうちに任命され、その多くは高二まで持ちあがつて文芸を続けるということがある。そして中三の時に文芸に入らなかった者が、高校に入ってから文芸に入りたくなつても、入れる可能性は少ないのである。この現実、毎年のごとく生徒会幹部は「皆が自主的に参加していく文化祭」といつているが、その参加の芽を摘みとっていることになりはしないだろうか。

確かに、文化祭は大事業であり、勝手を知った者でないといわず半年程の準備期間で、例年を踏襲するようなものをつくるのは難しいかもしれない。しかし文芸の顔ぶれの大多数が前年度と変わらないことが文化祭のマンネリ化を助長する結果にはならないか。

もちろん、今年に限りか、文芸主催の旧フェスや文化祭の発行など、新しい努力を認めるのに吝かではないが、文化祭の抜本的改革、例えば日数の変更や前夜祭、後夜祭の設置などに関しては特に目新しいものはなかった。

これらは極端な例かも知れないが、現在の文芸制度では先例にゆきすぎで、新しいものが生まれる余地は少ないように思うが、いかがなものであろう。

来たるべき第三十五回文化祭に向けて、これが現在の文芸制度を改善する一石になれば幸いである。
